## 4.解熱剤の使い方

まず、お母さんたちに理解してもらいたいことは、解熱剤は５～６時間、熱や痛みを
やわらげるだけで、病気を治す薬ではないということです。
また子どもの場合、歴史的に見ても副作用が問題となり、使える薬が限られています。

こどもは、おとなと違って熱には強く、３８℃以上でもケロッとしていることがあるのも事実です。
お母さんたちも、熱があっても家事や育児が普段どおりに出来れば、解熱剤は使わないはずです。
こどもが、ある程度元気なら、熱の高さ（体温計の数字）だけでは、解熱剤を、使わないように
したいものです。

熱が、こどもに悪影響を与えている場合例えば、水分がとれない、元気がない、グズッて寝つけない
などのときに、それらのことができるように、目的をもって使いましょう。

それでも熱が心配というお母さんは、３８.５℃以上を目安として使うとよいでしょう。日中、
手をかけられ充分な観察ができれば、解熱剤の必要はあまりないことが多いのです。

## 5.解熱剤の種類

こどもに使える薬剤の種類はあまり多くありません。

当院では解熱剤はアセトアミノフェン（アンヒバ坐薬、カロナール細粒・錠）を処方しています。

乳児には坐薬として、幼児、学童には粉薬、錠剤として、大人には錠剤として投与しています。
この薬は歴史が古く、一番安全な薬と考えられています。

インフルエンザや水痘のときに他の、アスピリン、ボルタレン*R*（ジクロフェナックナトリウム）、
ポンタール*R*（メフェナム酸）などの強い作用の解熱剤を使用すると脳症発症の頻度が増える可能性が
疑われていますので、ふだん乳幼児にそれらの使用は好ましくありません。

３歳から４歳を過ぎると、坐薬に対する抵抗が増えてきます。
嫌がるこどもを押さえ付けて、坐薬を使うことは恐怖心を植えつけることになり、
決してよいことではありません。
徐々に、経口薬に移行するように心掛けましょう。くれぐれも無理をさせないようにして下さい。